

大阪府公立小中学校主査会会報

SMILE

(スマイル)

第102号

令和7年(2025年)10月1日

編集・発行

大阪府公立小中学校主査会

<http://syusakai.main.jp>

SMILE: School (学校) Management (経営を) Improve (よりよくする) LEader (リーダー)

第26回 夏季フォーラム

子どもが輝く未来社会の学校事務～学校DXで描く新時代の働き方～

7月30日(水)アウリーナ大阪にて、第26回大阪府公立小中学校主査会夏季フォーラムを開催しました。会長の開会挨拶、来賓の方々のご挨拶を紹介いたします。(紙面の都合上、要旨のみのご紹介です。)

大阪府公立小中学校主査会会長 浅田 悠摩

夏休みを迎えたこの時期、業務が少しは落ち着き、学びの多い機会ともなるタイミングではないでしょうか。

先日、ある地域の学校事務の教育研究会に参加し、自分の地域にはない取り組みや参加者の皆さんの雰囲気に触れ、大変良い刺激を受けました。本日の研修も、皆さまにとって新たな気づきや刺激を得られるものになれば嬉しく思います。

昨年度は、夏に教育研究家の妹尾昌俊様、秋に東洋大学の葛西耕介准教授をお迎えし、これからの働き方やAI活用について学ぶ機会を得ました。

本日のご講演は奈良教育大学の小崎誠二教授をお迎えします。打ち合わせでは、ご自身の実践・教育現場の現状・学校事務の未来についてなど、どのお話もインパクトがあり終始惹きこまれ、すっかりファンになってしまいました。

変化の激しい学校現場において、私たちの進むべき方向を示す道しるべになるのではないのでしょうか。これまでの学びをつなぎ、集大成となりうる内容だと期待しております。



大阪府教育庁 教職員室 教職員人事課 小中学校人事グループ 課長補佐 伊熊 恭子 様

日頃より学校事務の改善・改革、さらには大阪の学校教育の発展にご尽力いただき、感謝と敬意を表します。

学校事務職員は総務・財務の専門家として学校経営を支える重要な存在となっています。また、働き方改革が急がれる中、教員だけでなく、事務職員自身の働き方も見直すことが重要です。

中教審答申に示されている「令和の日本型学校教育」でも、事務職員の校務運営への積極的な参画や、これまでの枠にとらわれない学校事務の在り方を構築していくことが求められています。

大阪府教育庁は今後も皆様と志を同じくし、ともに学校教育の充実に向け、努力を重ねてまいります。本日のフォーラムが子どもたちの輝く未来につながることを心より願っています。



大阪府町村教育長会会長 中川 修 様

平素は、学校組織・運営の活性化に大切な役割を果たしていただき、心から敬意を表します。

少子高齢化やグローバル化が進む中、学校をとりまく環境は依然として厳しいものがあります。複雑化する課題に対応するためには、これまで以上にチーム学校としての組織対応、さらにその中核のひとりとして、専門性を発揮いただくことが求められています。

また、働き方改革を進める上で、教員が子どもたちと向き合う時間を確保するために、皆様の積極的な関わりも不可欠です。

主査会をはじめとする各研究団体が、学校や地区の枠を超えて「チーム大阪」として学校事務の充実と発展に向け邁進されることを期待しております。



大阪府公立小中学校主幹会会長 岡本 将浩 様

主幹会は今年2月、「みんなで考えよう共同学校事務室」をテーマに冬季フォーラムを開催しました。共同学校事務室につきましては、事務職員が総務・財務の専門職として学校経営に主体的・積極的に参画するための重要な役割を担っていると考えています。

私たちは、予測困難な時代に対応し、新しい時代の学校事務のスタイルを創り上げる必要があります。そのためには、事務職員一人ひとりの実践、組織としてのつながり、そして研究会活動の推進が重要です。

今後も、主査会や府事研といった大阪の学校事務研究団体と連携し、大阪の学校事務のさらなる発展に取り組む所存です。



講演 「いまとこれからの教育 ~教育をデジタル化する意味は何か~」

講師 奈良教育大学 大学院 教育学研究科 スクールDX研究室 教授 小崎 誠二 様

奈良教育大学 大学院 教育学研究科 スクールDX研究室 教授 小崎 誠二 様 から教育にデジタル技術を導入する意義や、学校教育の将来の展望についてご講演いただきました。

1. 「校務DX」(デジタル・トランスフォーメーション)とは何か?

「デジタル化」と「DX」の違いを理解しておく必要がある。「DX」とは、単に情報システムやパソコンを扱うことではなく、それらを使えるようになって“豊かな生活”を実現することをめざした概念として提唱されたものである。

○ デジタル化の3段階

デジタル化には以下の3段階がある。

Step.1 デジタイゼーション(Digitization):アナログのものをデジタルに置き換える段階

Step.2 デジタライゼーション(Digitalization):別々にデジタル化されたものが連携され統合される段階

Step.3 DX(Digital Transformation):デジタル化によって生活の豊かさが実現される段階

デジタル化によって、さらなる生産性やプラスに結びつかないと「DX」とは言えない。

したがって、学校で「連絡システムの導入で電話が減った」とか「プリント配付をやめてデータ配信にした」ということは、単なる“校務のデジタル化”にすぎない。「デジタル化して生まれた状況を何に活かすか」がはるかに大切で、「デジタルを導入したから、新たな環境になった」といえて、はじめて“校務DX”だと言える。

○ デジタル化に大切な考え方

デジタル化することで、逆に業務が増えたり、忙しくなって仕事がしんどくなってはいないだろうか?「あれもこれ処理しないといけなくて追われている」となれば、本末転倒で、そこにデジタル化の陥りがちな“罠”がある。

事務業務をデジタル化するのであれば、それで仕事がおもしろくなったり、効率化されて楽になり、気持ちが豊かにならないといけない。「デジタル化したことで、働き方ややりがいが変わったか」という確認が大切。

目的は、豊かな生活を送ることにあるのだから、PCを有意義に使うことで、PCを使う時間が減らなければならない。

また、システムの内容は、なるべくシンプルな方がよい。細部までシステムを作り込んでしまったり、便利にしてしまったりすると、それはもう“罠”に陥っているのを疑う必要がある。「本当にここまで必要なのか?」「“作業”になってはいないか?」「きちんと“仕事”になっているか?」「担当がいなくなっても大丈夫か」という問いが必要。

2. 学校教育のデジタル化の現在と将来展望

○ GIGAスクール構想は、世界では“GIGAインパクト”と呼ばれるほど、驚きをもって捉えられている。

「すべての学校の教室でインターネットにつながる」「公費で端末が無償配付され、すべての児童生徒に行き渡っている」という例は、世界でも日本だけだ。各国の教育委員会や教員、学校スタッフとの意見交換でも、「そのような環境で育った日本の子どもが20年後には世界を時代遅れにするのではないか。近未来はすでに日本にあるのではないか。」という声があがるほど、日本のデジタル教育の環境は突出した面がある。

○ 一方で、欧州では不登校児童もいないし保護者対応もほとんどない国がある。職員は昼には職員室を閉め、時間をたっぷりって外食に行く国もある。勤務時間もフレキシブルで家族との時間も大切にしている。日本に比べるとゆとりをもって働いている印象だ。

文化の違いもあり単純な比較はできないが、今の日本の学校教育や事務仕事には、教育を超えた少し行き過ぎたところがあるのではないか。もし、しなければならぬゴールに至るまでに、余計なひと手間、ふた手間があるのであれば、デジタル化を契機にデトックスしていくのがよい。



○ 国でもクラウドを活用し、省庁の発出文書を教育委員会や学校が即時受理できるような仕組みができないか検討をはじめている。また、県や基礎自治体ごとにバラバラの事務システムを、可能な範囲で共通化したり、データの形式を標準化したりすることも検討している。もし、全国で標準のシステムに揃えてしまうことができれば、アンケートや調査類の多くも必要なくなるはず。

たとえば、校務・事務など諸々の校内システムをクラウドで一括統合することは技術的には不可能ではない。いまは「学校としてその方向に向かうかどうか」が問われはじめている。

○ デジタル資料の活用は今後も広がっていくだろう。デジタルは拡大・縮小やフォント変更も自在で、各自に見やすい状態を作りやすい。紛失や忘れる心配も少なく、重要な会議は、情報管理も含めてデジタル資料のみで行うのも有効なやり方だ。

教科書も、将来的には「デジタル教科書は無償、紙の教科書は有償」という逆転すら有り得るのではない。クラウド上のデジタル教科書は、いつでも最新のものを参照できる可能性もあり、更新・修正も容易になる。印刷・製本の手間や書店への流通のコストを考えると、経済性の点からも合理的と言えるかもしれない。

○ 業務での生成 AI 利用には十分な注意が必要になる。個人端末や個人契約のものを利用すると、情報は生成 AI の学習に使われると“情報の持ち出し”と同じことになる。公用のスマートフォンなどの配備も考えていく必要があるかもしれない。

ただ、いまの生成 AI は、閉じられた環境でのみ利用できるものもある。自校のみ、あるいは市内のみでデータを参照できるほか、連携さえ進めば自治体相互で業務を共有できるような未来が期待できる。文部科学省でもすでに実証事業をはじめている。

○ 8 月には生成 AI の利用の年齢制限が撤廃されたサービスもある。子どものときから AI に触れた世代の登場によって、いずれ、いわゆるオフィス向けの単体のインストール製品は消えていくだろう。AI であれば口頭指示ひとつで文書作成から関数による作業、文書の整えまで済んでしまうからだ。私たちも、いま、「前の時代の一番後ろで働く」のか、「新しい時代の先頭で働く」のかという岐路にいてのではない。もし、両方の時代の橋渡し役を担うことができるのであれば、存在感が増すのではない。

3. デジタルを活用した業務改善のヒント

○ 研修・講演への活用

例えば、アンケートは講演中でも入力できる。回答内容がリアルタイムで全員にシェアされ、講師もそれを見ながら講演を進めれば内容も充実し、受講者もアンケートの持ち越しがない。「業務を持ち越さない」ことが効率化の第一歩ではないか。さらに、アンケートと報告書が連携され、入力内容が出張報告書に自動反映されれば、帰庁時の業務の持ち越しもなくなるができる。

○ 資料作成への活用

学習指導案の作成を例にあげると、学習指導要領や全国の指導案を読み込ませながら内容を指定すれば、求めている指導案の精度の高い叩き台ができてしまう。これは、考える力を奪っている面もあるので、繰り返し試行錯誤をしながら力をつけるなどの工夫が必要であろう。

○ テキスト化・データ入力・表やグラフ作成への活用

手書きのものをカメラで撮影して読み込ませると、誤字脱字も修正して簡単にテキスト化される。そうすると、単純な事務的文書の清書は必要なくなるかもしれない。過去の会計帳簿を撮影し読み込ませた結果、表の集計にミスがあったことが生成 AI によって判明した例も報告されている。

入力範囲を口頭で指定して読み上げれば、データ入力も可能なうえ、様式に合わせた体裁に整える作業やグラフづくりも容易に行うことができる。

○ プレゼン案作成への活用

プレゼンや講演を行うときに、テーマについて生成 AI と対話する方法も有効。やり取りは全てテキストで残るし、最後に「これまでのやり取りを展開し、パワーポイントの資料に」と生成 AI に指示すれば、プレゼン資料案が完成する。この方法は、移動中の車内でも実行できてしまう。

最後にひとつの事例を紹介する。児童の絵画作品へのコメントを生成 AI で作成した例だ。学習指導要領も踏まえつつ児童の意欲を高めるコメントがすぐに作成されたが、特筆すべきは、その事例では「コメントが嬉しかったから」といって、作品を描いた児童全員が、コメントを参考にしながら絵を描き直してきた点だ。児童を励まし、意欲的にさせることに、AI が貢献したことがわかる。

我々の仕事、働くということは、本来の意味は、こういうところにあるのではない。事務仕事においても、本来は前向きにどんどん作っていきけるクリエイティブな仕事のはず。それを「システムがそうなっているからそれを使ってどうするか」という点にばかり、考えが陥っていないか。

デジタル化によって効率化や共有、協働も可能になっているいま、ぜひ、私たちの仕事が、作業ではなく「創造的な活動」になればいいと思います。



夏季フォーラムアンケート

たくさんの貴重なご意見 ありがとうございます!



①一番興味をもった箇所はどこですか?

- ・デジタル化とDXの違いについて知ることができました。
- ・なんでもデジタル化したらいいというものではないということ。今回のお話はデジタルを身近に感じることができる内容だったので苦手意識がなくなるように感じた。
- ・生成AIを活用して業務の効率化をあげていくということ。活用することに良いイメージがなかったのが、いかにうまく付き合っって効率を上げ、デジタル化を図り豊かな生活をしていくかを考えていくと言うところに興味が湧きました。
- ・海外の方の日本の教育に対する反応についてのお話が興味深かったです。
- ・学習指導要領を始め、今後の日本の教育が大きく変わっていくこと。

②お話を聞いて取り入れたい箇所はどこですか?

- ・パソコンから離れるということです。
- ・AIなどを上手に取り入れて、自分以外の視点で考える実務の最適化。
- ・しんどい、面倒くさいことは間違っている。やりすぎていることはやめてシンプルにする。
- ・デジタル化したことにより、どう働き方がどう変わったのかそこまで考えなければ、DXではないことで、もっと生成AIについて勉強しようと思います。
- ・資料作りについて活用したいなと思いました。
- ・最終的に子どもに何を還元できるか、そのためにどう仕事をしていくべきか、について考えていきたいと思いました。

研究チーム「第20期 特別委員会」メンバー募集

主査会は“主査の職務・職責の追究”を活動理念としています。その一環として「特別委員会」を設置し、研究活動を行っています。ご興味のある方はお近くの役員・常任理事までお声かけください。

学校事務について、一緒に考えてみませんか



過去の研究テーマ ↑

会員のメールアドレスの登録について

大阪府公立小中学校主査会では、本会費にかける支出費削減のため会報 SMILE 等資料について、メールによる配信に変更させていただくこととなりました。

つきましては以下の QR コードを読みとっていただき、お忙しい中ではございますが、12月19日(金)までに入力フォームよりメールアドレス情報登録についてご回答をお願いいたします。

配信による資料提供への切り替え時期につきましては、後日あらためてお知らせします。

【登録フォームURL】<https://x.gd/J04co>



回答項目

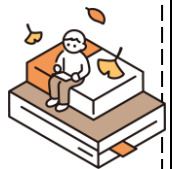
- ①お名前
- ②メールアドレス
- ③地区⇒市町村について

主査会研修会のお知らせ

日時 12月9日(火) 午後2時30分～5時00分 (受付:2時15分)

講演 【第一部】『改訂 OSAKA 小・中学校事務職員スタンダードからみる主査の役割』
講師 大阪府教育センター 教育企画部 企画室 主査 川端 浩嗣 様

【第二部】『校務DXと生成AIの力 ~業務改善から学校経営参画へ~』
講師 摂津市立別府小学校 主幹 宮本 大嗣 様



■ 主査会活動と予定 ■

- 7月1日 SMILE101号 発行
- 7月8日 常任理事会
- 7月30日 第26回夏季フォーラム
- 8月28日 常任理事会
- 10月1日 SMILE102号 発行
- 10月2日 常任理事会
- 12月9日 主査会研修会

主査会ホームページへ LOG IN !



★パソコンでも★スマートフォンでも!★

<http://syusakai.main.jp>

◇主査会に関するお問い合わせは
摂津市立味生小学校 浅田悠摩まで

TEL:06-6349-1853

